

ブダペスト通信

盛田 常夫



2024年 NO. 17

9月9日

2024年全米オープンテニス観戦記

今年の全米オープンでは男子がジョコヴィッチとアルカラスが早々と敗退してしまったので、スィナー*（シナーと発声するのは誤りである）の独り舞台だった。これに比べて、女子はタイプの異なる選手が最後まで競い合うという面白いゲームが展開された。

* 日本の英語教育で、See（スィー）と she（シー）の発音の区別は中学英語で習うが、これ以外の発音の区別は曖昧なままに放置される。Singapore はシンガポールではなくスィンガポール、Brasil はブラジルではなくブラズイルである。国外でシナーと発声しても、テニス選手のことを言っているとは理解されないだろう。日本語ですら、「すし」と「しし」を区別できない方言を笑うのに、英語ではこの違いが見逃されてしまう。日本の外国語教育で、発声・発音教育が蔑ろにされていることが、外国語に弱い日本人とレッテル張りされる理由の一つである。

ハンガリーの対外経済外務大臣 Szijjartó も、シーヤルトーではなく、スィーヤルトーと発声しないと、ハンガリー人には何を言っているのか分からない。

2024年9月9日

パワーヒッターの大坂なおみとガウフが、それぞれストロークに強いムホバとナヴァーロに負けてしまった。接戦であったが、相手のストローク力に屈してしまった。

ナヴァーロはウィンブルドンでも、大坂とガウフを破っている。生来のパワーでは敵わないが、ストローク力には絶対的な自信をもっている。ウィンブルドンでは芝の難しさを感じさせないストロークで大坂を圧倒し、同じくパワーヒッターのガウフも退けた。170cm の身長だが、打点が安定していてストロークが良い（大坂はボールを引き込みすぎるので、芝でのストロークが不安定になる）。ガウフは苦手意識があるのか、ナヴァーロ戦第 3 セットの勝負所でダブルフォールトを連発して自滅した。この試合で記録したダブルフォールトは 19 本である。大坂もガウフも、男子並みの第一サーブが決まらなると苦しい試合になる。

2 回戦で大坂を破ったオールラウンドプレイヤーのムホバは、決勝にコマを進むだろうと思われていた。準決勝の相手はやはりストローク力に定評のあるペグラだが、ストローク一本やりのペグラにたいして、ムホバのプレーの幅ははるかに広い。実際、第 1 セットを 6-1 で取り、第 2 セットのダブルブレイクを取る寸前のところまで行き、楽勝ムードの試合運びだった。ところが、ダブルブレイクポイントを取り損なってから、試合ががらりとペグラに傾き、ペグラに大逆転を許した。大きなタイトルを取り切れないムホバにとって、今年の全米は願ってもないチャンスだった。大舞台の経験の少なさが、大逆転を許した。

一方のペグラはすでに 30 歳になるが、大舞台でのタイトルはない。体もナヴァーロと同じ 170cm と大きくはないが、ナヴァーロと同様に、粘り強いストロークで相手を追い詰める。準々決勝で世界ランク 1 位のシフォンテック戦で、ストローク戦に打ち勝ち、見事にストレイトで勝利した。

また、ナヴァーロは準々決勝の対バドーザ戦で、第 1 セットを取ったが、第 2 セットはダブルブレイクされ、1-5 となった。しかし、そこから連続 6 ゲームを連取して、バドーザを破った。ここでも、パワーのあるバドーザがなぜかストロークを打ちきれなくなり、簡単なミスを連発して自滅した。大坂やガウフのパワーテニスを破った力は本物である。パワーヒッターのバドーザもナヴァーロの餌食になった。

生来のパワーとストローク力

大坂、ガウフ、バドーナなどの生来の身体能力とパワーでジュニア時代から世界の舞台で戦ってきた選手と、ペグラーやのヴァーロのような体が一回り小さくパワーはないが、遅咲きのストロークプレーヤーとの戦いは興味深い。

ペグラーとナヴァーロは大学テニス出身で、プロデビューが遅い。昨年デビューしたナヴァーロは昨夏の WTA ブダペスト大会で予選から出場するほどランキングが低かった。それが 1 年で全米ベスト 4 にまで急成長した。ウィンブルドンの大坂戦では素晴らしいストロークを展開して大坂を圧倒したのに驚いた。体が小さい分だけサーブのパワーはないが、それを補って余りあるストローク力がある。2021 年の全豪オープン決勝で、大坂が戦ったブレイディも大学テニス出身である。大学テニス出身の選手は大成しないと言われていたが、ブレイディ、ペグラー、ナヴァーロはその評価を覆している。10 代では天才少女たちに敵わなかったが、大学で基本のストロークで鍛錬を積み、満を持してプロテニス界に入り、天才少女たちを打ち負かすストーリーは興味深い。

もっとも、ペグラーもナヴァーロも大富豪の家に生まれ、小さい時からコーチを雇ってテニスができる恵まれた環境にある。すぐにプロに転向せず、大学へ進学したことが正解だった。天才少女たちはミスすると悔しがると、ペグラーやナヴァーロはじっと我慢して、次のチャンスを待つ。この姿勢の違いは大きい。好感がもてる選手である。

サバレンカ

サバレンカは準決勝まで相手を圧倒して勝ち上がってきた。180cm を超える身長と 80kg はあると思えるウェイトから発するショットは男子の平均速度に達している。大坂やガウフのような生来のパワーでここまで活躍してきた選手である。

サバレンカはほとんどのボールを全力で打つ。球のスピードは男子並みで、それがダウンザラインに決まると、ストロークに強いペグラーでもナヴァーロでも太刀打ちできない。ペグラーは決勝の第 1 セットと第 2 セットで早々とサーヴィスブレイクされ、これでは勝負にならないと思われたが、両セットとも、最後の最後に相手のサーブを破って 5-5 まで辿り着き、意地を見せた。ところが、サバレンカは再び息

を吹き返し、ラインぎりぎりに強打を炸裂させ、ペグラの追撃を振り切った。まさに、「パワー対辛抱」の戦いだったが、最後は力に押し切られてしまった。

サバレンカは一喜一憂するタイプなので、いったんストロークが崩れると大負けしてしまうが、この大会では最後までスーパーショットを連発して念願の全米タイトルを獲得した。恋人が自殺するという不幸を乗り越えての勝利だった。

サバレンカが23年1月の全豪で初めてグランドスラム大会優勝を飾り、ミンスクに戻ったところで、ルカシェンコ大統領の祝福を受けた。ロシアのウクライナ侵略が始まった後、サバレンカは侵略戦争について沈黙を守ってきた。ロシアのトップランカーの選手たちの多くが侵略戦争反対を意思表示しているのに対し、サバレンカだけが沈黙を守り、戦争に協力するルカシェンコ大統領の祝福を受けたことに批判が集まっていた。2023年全仏オープンの記者会見で何度もこの点を質問されても明確に答えず、以後、記者会見をキャンセルしている。その後、仕方なく戦争に消極的に反対する意思を表示したが、本音ではないと思われる。いかに一介のスポーツ選手であろうと、自国が加担している戦争にたいして意思表示できない姿勢が常に問題視されている。

男子はオフェンス、女子はディフェンス

女子は天性の身体能力で攻撃的テニスをする選手と、粘り強いストロークで対抗する選手との戦いになっている。今大会のサバレンカのように、全力で叩くボールの8割以上もコートに入ってしまうと、ストローク技術だけでは対抗できない。しかし、攻撃的テニスは諸刃の刃で、いったん崩れ出すとあっけなく負けてしまう。その意味で、女子テニスではディフェンス力のある選手の方が優位にある。

他方、男子テニスの現状を見ると、まずサーブ力がない選手は上位に進出できない。それほどまで、現代の男子テニスではサーブ力が重要である。強いサーブを打てる体の力がないと、現在の男子トーナメントで上位に食い込むことはできない。

スィナーはサーブ力があるだけでなく、ストロークの威力が凄い。細身の体で、これほど強いボールを打てるのかと思わせる。しかも、スタミナもある。運動能力がきわめて高い。オフェンスに優れた選手でなければ、男子テニスで上位に食い込むことは不可能になっている。準決勝でスィナーが戦ったドレーパー（イギリス）も、190cmを超える身長と85kgはあると思われる体躯から繰り出すサーブもストロ

ークも迫力があつた。コート内で胃から水分を戻してしまう体調不良もあつたが、2セットまでスイナーと接戦を演じた。しかし、健闘はそこまで。スタミナがあり、プレーの質が落ちないスイナーにストレイトで敗れた。

日本人選手

日本人ジュニア選手で男子は坂本怜、女子は園部八奏（わかな）の両名が活躍した。もっとも、すでに今年の特豪ジュニアで優勝（今大会はベストフォー）している坂本選手にはジュニアの大会ではなく、もっと体力をつけて ATP トーナメントで活躍してもらいたい。190cm を超える長身だが、まだ体が出来上がっていない。二回りほどパワーを付けないと、ATP ツアーで活躍するのは難しい。

園部選手はジュニア準優勝で終わったが、16歳ですでに170cmの身長があり、ボールにラケットを当てるのではなく、ラケットを振り切ってボールを叩く力をもっていることが評価されている。これまで日本人選手の多くは身長が低く、ラケットをボールに合わせるだけのテニス選手が多かったが、園部選手は国際標準のテニスをする。

ビッグスリーが舞台から去りつつある男子テニスでは20代前半の選手が主導権を握りつつある。また、女子テニスは誰が勝ってもおかしくない状況にある。大坂選手は現在でもトップテンの力をもっているが、ランキングが低いために、大会の早い段階で手強い相手とぶつかってしまう。もっとも、もうこれまでのパワー一本やりのテニスでは安定して上位にくいこむことが難しい。苦手を克服する練習がなければ、グランドスラム大会で勝ち進むことは難しい。スライス、前後のフットワークとネットプレー、サーブレスィーヴ（ブロックレスィーヴ）など、大坂選手が克服すべき課題は多い。問題はコーチがこれらの練習に重きを置いているのかどうかである。ただ、大坂選手がその練習をしたくないという場合にはどうしようもないが。コーチの厳しさが欠けているのか、それとも大阪選手に向上心が欠けているのか。コーチの選択は選手に主導権があるから、選手が嫌がる練習を強いるのは難しい。体をもう少し絞り、苦手のプレーを克服する意思と努力なしに、再びグランドスラム大会の優勝を狙うのは難しい。

パリのパラリンピック大会と日程が重なり、今回の全米大会で車いすテニスは実施されなかったが、パラリンピックで男子の小田凱人、女子の上地結衣がともにシ

ングルスで金メダルを獲得した（上地選手はダブルスでも金メダル）。小田選手はまだ18歳である。少なくともこれから10年は小田時代が続くだろう。